

YMCA TOZANSO 110th ANNIVERSARY

YMCA東山荘 110年の歩み

2015年から2025年まで



国際青少年センター YMCA東山荘

<https://www.ymcajapan.org/tozanso/>

公益財団法人 日本YMCA同盟
国際青少年センター YMCA東山荘

Contents

110周年に寄せて（運営委員長 村田堅太郎） ——— 01

第一部

2015年から2019年まで ——— 02

2020年危機

①コロナショック ——— 03-05

②ナラ枯れ被害 ——— 06

2021年から2025年まで ——— 07

第二部

歴史とともに ——— 08

静岡県景観賞の受賞

国の登録有形文化財への登録

地域とともに ——— 09

御殿場市東山青少年広場

東山・二の岡路観光協議会

YMCAピンクシャツデー

チャリティーゴルフ

世界とともに ——— 10-11

第20回アジア・太平洋YMCA大会

ウクライナ避難者支援

未来に向けて ——— 12-13

施設改修

Sustainable Planet（環境負荷の軽減）

プログラムの提供

年表 ——— 14-15

110年の歩みとこれからのYMCA東山荘 ——— 16
（総主事 田口努）

110周年に寄せて

1915年、自然豊かな静岡県御殿場の地に誕生したYMCA東山荘は、本年、創立110周年という大きな節目を迎えることができました。この長きにわたる歩みは、YMCAに関わるすべての方々のご理解とご支援、そして何よりも一人ひとりの「この場所を大切に思う心」によって支えられてきたものであり、ここに改めて深く感謝申し上げます。

東山荘は、キリスト教の価値観に基づき、青少年の健やかな成長を支える「場」として、また、自然と人、人と人が出会い、学び、共に生きる喜びを体験する「学びの場」として、多くの人々に愛されてまいりました。この110年間には、戦争、災害、社会の大きな変化など、さまざまな困難がありましたが、その都度、立ち止まり、考え、協力し合いながら、この場を守り、次世代につないできました。

とりわけ直近では、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、人と人とが直接触れ合うことが制限され、東山荘においても多くのプログラムやキャンプが中止・延期を余儀なくされるなど、経営・運営両面で大きな影響を受けました。人々の心にも「集うこと」への不安が生まれ、従来のような形での自然体験活動や宿泊研修が困難になる中で、私たちは「人と人との関係性とは何か」「自然の中で学ぶことの意味はどこにあるのか」を、改めて深く問い直す機会となりました。

一方で、このような未曾有の状況を経たからこそ、自然の中で過ごす時間、人と直接関わる体験、集団の中で互いに支え合う営みの尊さが、これまで以上に見直されているのも事実です。

110周年を迎えた今、東山荘は次の時代に向けて、さらに開かれた学びと交流の場として生まれ変わろうとしています。これまでの歴史と歩みを振り返るとともに、東山荘の現在地と、これからの未来を共に考えていく機会となればと願っております。

今後とも、変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



YMCA東山荘運営委員長
村田 堅太郎

第一部

ここでは、2015年からの10年間をおおむね時間の流れに沿ってふりかえってみたい。特に2020年はコロナ禍が始まり、「人と人が出会う場」であるYMCA東山荘にとっては、史上最大の危機ともいえる年となった。さらに自然界の流行病である「ナラ枯れ」も加わり、東山荘は厳しい試練の時を迎えた。



2020年8月の主催キャンプにて

2015年から2019年まで

前所長 堀口 廣司（任期2015年4月～2020年3月）

私が赴任して最初の課題は、新本館を建設することだった。総工費4億1千万円。そのうちの1億円は募金でまかなうこととなった。

達成できた背景には多くの方や団体、企業のご尽力があった。当時の日本YMCA同盟会長の正野隆士さん、笈川光郎さんをはじめ多くの関係者が募金のために東奔西走してくださった。ワイズメンズクラブからはまず御殿場クラブが百万円をご寄付くださり、それにより富士山部、そして全国へと広がった。東西日本区交流会を開催するなどし、全面的に協力してくださった。御殿場ロータリークラブも50周年を記念して百万円をくださった。また、御殿場市の指定避難所の改築ということで市から補助金が5,700万円おりたことも有難かった。そして2016年10月9日、無事に新本館献堂式をとりおこなうことができた。

地域との信頼関係の構築は、広岡浅子展の開催（2016年2月～3月）、「東山・二の岡路観光協議会」の活動があるほか、「市民協働型まちづくり事業」として市内小中学校に「防災マップ」を配布した。近隣の青少年会館跡地には御殿場市により防災機能を備えた「御殿場市東山青少年広場」が整備され2017年4月開所したが、東山区の皆さんのご理解とご支援をいただき、その指定管理を開所以来請け負っている。地元との窓口は副所長だった佐久間真人さんや光永尚生さんが担った。

創立100年を迎えた東山荘は2016年に、新本館を設計された池田通則さんのご尽力もあり、静岡県景観賞優秀賞（民間施設部門）を受賞した。フィッシャー館や齊藤記念館も国の登録有形文化財に指定された（2020年3月付）。このような評価を通して、単に建物ではなく、100年の人と人との歴史こそがYMCA東山荘であることの証明をいただいた。

多くの人にお越しいただいてきた歴史に感謝して、100周年記念礼拝、記念シンポジウム（スプリングフィールド大クーパー学長、坂口順治さん）等の100周年記念イベントを行い、現代における東山荘ミッションの意義を発信し続けた。地の塩、世の光として「今をどう生きるか」という命題を東山荘に残る132枚の写真で綴った『東山荘100年の歩み』が、坂口順治さんを中心に、徳久俊彦さん、桑田隆明さん、神崎清一前総理事をはじめとする全職員の尽力によって発刊できた。

利用者の拡大としては海外からのお客様に富士山を間近に見える宿舎を体験してもらう、大自然の中で家族の絆を強く太くしていただくことに挑戦した。各委員会の内海重忠さん、渡邊巖さん、杉山将己さん、若林久美子さん、青山鉄兵さん、伊藤幾夫さん、野々垣健五さん、田原積さんや皆さんから多くのご指導をいただいた。

この5年間の相互作用の結実が、全国椿サミットのメイン会場（2019年4月）や、第20回アジア・太平洋YMCA大会の開催（2019年9月）につながった。

2020年危機①コロナショック

コロナ禍のYMCA東山荘

中国での発症が世界から注目された新型コロナウイルス。2020年2月には横浜港に入港した英国船籍のダイヤモンドプリンセス号の乗客・乗員の約20%、712人の感染が判明した。しかし人びとの多くは世界中を襲う大惨事になるとは想像できなかった。時間の経過と共に感染状況は広がり、国内で感染者が出ない都道府県は皆無となった。2月下旬には政府は都道府県境を越えての移動や外出の自粛を求め、学校の一斉休校にまで及んだ。3月にはWHOがパンデミックを宣言し、東京五輪の延期も決定した。4月には政府から緊急事態宣言が発令され東山荘もご利用を見合わせる学校、団体が日を重ねるにつれて増えていき、4月から6月は利用者がほぼゼロという休館状態に陥った。

当初2020年度の予約者数は25,211名であったが、日毎に減少し、3月末の時点で14,000名まで減少した。例年の利用者数が30,000名を超えるので大幅な減員であった。東山荘職員は4月からの14,000名をお迎えすべく、消毒薬やパーテーション、非接触型体温計の設置、ペーパータオルの準備等、感染症対策に主眼を置き、安心、安全な宿泊・研修施設として利用いただける準備を行った。

しかしながら4月からのキャンセルの連絡は増える一方だった。利用者の多くの割合を占める学校はそのような中でも野外活動、修養会の開催を希望され、ギリギリまで判断を延ばされたが、中止する学校が多かった。結果2020年4月の利用者数は2人、5月は0人、6月は5人であった。これほど少ない利用者は開設以来初めてであったのではないだろうか。ゴールデンウィークに計画していた主催キャンプもやむなく中止となった。夏の富士山も閉山が決定され、富士登山プログラムも実施できない東山荘史上初の事態となった。

そのような状況の中、神奈川県海老名市は、公立小学校13校、約1,200人の児童が東山荘を利用されることを決定された。当時、海老名市の伊藤文康教育長が日本YMCA同盟機関誌『THE YMCA』に寄せられた文章を別枠にて記す。（次ページ）東山荘から帰った子どもたちから手紙や短歌が送られた。「今でも出来事すべて覚えてます。美味しい食事、清らかな水の音、フカフカのベッド」、「活動内容や寝時間の1秒1秒が面白かったです!」、「富士山の大きさに驚きました」、「私たちのために用意してくれてありがとうございました」、「蜘蛛の巣に付いた雨の滴が綺麗でした」等。子どもたちのはじける声が聞こえてくるようであった。海老名市の子どもたちの来荘は東山荘職員にとって大きな励みとなった。

一方、利用者が激減する中で職員はできる限りのことをしようとさまざまな働きを行った。

交代で市内の高齢者福祉施設（「十字の園」、「平成の杜」）に出向し、洗濯物の処理や施設内の清掃を行い、厨房の助手としても活動した。この出向は、厳しい東山荘の財政状況を助けると同時に、職員のホスピタリティを高め、ヘルスケアのトレーニングにもなった。東山荘に隣接する東山湖はオープンエアーのためコロナ禍でも釣り人が多く訪れていた。食堂と協力し釣り人への弁当販売を試みた。注文を受け、職員が注文者へカレー弁当を届け、正門前ではテイクアウトの販売も行い、市内から購入に来る方も多かった。また、東山荘内でも協議を重ね、十分な感染症対策を行った上で、政府のGo Toトラベルを活用し「第55回年末年始家族パーティー」を開催することとした。期間は例年より1泊減らし2021年1月2日までの3泊4日としたが、全国から73名の方が東山荘に集ってくださった。

利用者の減少は収入の減少になる。厚生労働省からの雇用調整助成金の活用を始め、政策金融公庫への申請・受給を行った。レイパーソン、ワイズメンズクラブ、企業からの支えもあり、厳しい状況だったが多くの善意が寄せられ職員は勇気付けられた。東山荘として弱くされた人びとの側にいることも続いた。熊本豪雨（2020年7月）や熱海市伊豆山土石流（2021年7月）等の災害支援に職員を派遣し復興の手伝いを行った。

利用者数比較表

	宿泊利用		日帰り利用	
	2020年	2019年	2020年	2019年
4月	2	4,921	106	1,199
5月	0	3,882	0	289
6月	5	2,889	319	809
7月	128	4,827	160	410
8月	198	6,313	328	202
9月	1,127	2,990	685	675
10月	716	2,821	1,024	557
11月	1,275	1,672	765	682
12月	753	1,058	483	605
1月	101	1,242	438	462
2月	82	483	654	616
3月	480	60	856	387
計	4,867	33,158	5,818	6,893

コロナ禍のネイチャープログラム

政府による度重なる緊急事態宣言発出等の影響もあり、宿泊利用総数は2019年度の33,158名から2020年度は4,867名(対前年度比約15%)まで落ち込んだ。全体の約4割を占める学校団体(幼・保〜大・専)のご利用激減によって、賑わいや明るさそのものが失われたような感があった。

東山荘ネイチャープログラムでは従前から「どんな天気もいい天気」、「どんな時でもあきらめない」、「どんな時でも楽しもう」を合言葉に掲げて、さまざまな自然体験プログラムを提供してきた。世の中全体が先の見えない不安感の中にあったコロナ禍においても、「こんな時だからこそできること」を考え、実行した。

主催プログラムの提供は、2019年度までは年間10件程度であったが、2020、2021年度は年間33件と大幅に増加させ、また、来荘が適わなくなった団体への出張プログラム提供の機会もいただいた。これはご利用団体が激減した代わりにできたことだった。

感染リスクの少ない野外でのデイキャンプや、予約不要で参加できるオープンデイ等、東山荘近在のお子さんやご家族

を主な対象にさまざまな活動を提供した。自粛ムードによる閉塞感を和らげ、心身のリフレッシュの機会を提供し好評を得た。2020年度からの4年間は文部科学省事業「子供たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験活動推進事業」を受託し、YMCAの目指すウェルビーイングを具現化して提供する機会ともなった。この期間に計250名以上の新規参加者を迎えその後の継続参加につながっている。コロナがあったからこそこの出会いである。

これらの活動を積極的に展開した背景には、公衆衛生の専門家による研修やリスク回避の指導、そして参加者とのリスクコミュニケーションがあった。お互いに信頼し合える関係性こそが、有事を冷静に乗り越える力となった。

漠然とした不安感に覆われていた人の世の一方、時が来れば花が咲き、渡り鳥が飛び交う自然は変わることがなかった。自然の逞しさや大らかさは、人を励ますものだとの実感を強めた。

自然は天気さえ思い通りにならないが、それが失敗や悪いことではないことも教えてくれる。コロナ禍の学びからも、諦めずに楽しみつつ、その時々を仲間と分かち合う喜びを今後もつなげていきたいと願う。

コロナ禍による休校措置が終わった6月、子どもたちが学校に戻ってくる姿が私には大変うれしく、「知恵を絞って子どもたちの教育を絶対を守ろう、それが私たち大人の使命だ」と強く思いました。海老名市の公立小学校13校の5年生約1200名が毎年訪れているYMCA東山荘と富士山での自然体験教室も同様です。子どもたちも保護者もこの教室を心待ちにしていました。

コロナ禍での生活の場を離れて自然の中に入れば子どもたちは安全だという思いがあるものの、安心して宿泊できるように受け入れ施設による周到的な安全対策も大切です。子どもたちの大事な成長の機会を守るために、学校とYMCA東山荘が協力して保護者にも丁寧な説明を行い、2020年度も自然体験教室が実現できたことをうれしく思っています。40数年前、小学校の教員をしていた頃に、宮沢賢治の詩に出会いました。

…… 雲からも風からも
透明な力が
そのこどもに
うつれ……

宮沢賢治 「あすこの田はねえ」より

机の上での学びも大切ですが、子どもたちは教室を飛び出し、様々な体験をする中で多くのことを学びます。自然と対峙し、泣いたり笑ったりすることで、雲からも風からも「透明な力」が子どもたちに注ぎだるのです。海老名市からも遠くに見える富士山を眺めながら「ぼくはあの山の森の中を歩いた」「わたしはあのふもとの道を歩いた」と、子どもたちの心の中に自然を感じることができる、これがその力です。

また、自然との関わりと同じように、人との関わりも大切です。例えばボランティア活動を通して、子どもたちは多くの人との関わりを持ち、自分が誰かの役に立っている、誰かに喜んでもらえる、そんな体験をします。子どもたちが主体的にたくさんの人との関わりをつくり、そこからも「透明な力」が注がれる、そんな体験をこれからもつくっていきたいと思います。(THE YMCA 2021年4月号)

神奈川県海老名市教育長(当時)
伊藤 文康さん



2020年YMCA東山荘の一コマ



4月、「東山荘の木と遊ぼう」を一般開放
しかしこの後緊急事態宣言により事実上閉館に



5月、誰もいない東山荘
グラウンドは草が伸び放題で、あちこちにイノシシの土耕跡が



6月、感染症対策をしながらデイキャンプ再開



6月から「さるボード」オープンデイ開催
毎回大賑わい



7月も毎週デイキャンプ開催
大自然の中で思いきり遊ぶ子どもたちの笑顔がはじけた



6月、カレーのテイクアウト販売を開始



8月、宿泊キャンプ再開
満天の星空を見ながら屋外で就寝



食堂はパーティーション設置
料理は盛り付けスタイルに

2020年危機②ナラ枯れ被害

最初の異変

コロナ禍が世界を襲った2020年、御殿場市や小山町をはじめとする富士山南東麓一帯で「ナラ枯れ」が大流行を始めた。森に囲まれるYMCA東山荘も甚大な被害を受けた。

「ナラ枯れ」とは樹木の伝染病の一つで、カシノナガキクイムシがナラ・カシ・シイ類の幹に穴をあけて侵入することで結果的に木を枯らしてしまう病気である。枯れずに生き残る場合もあるが、東山荘の場合、キクイムシが入った木の8割～9割は枯死したと思われる。「ナラ枯れ」が深刻なのは、①感染はすぐに収まらず、キクイムシが木の中で繁殖することによって年を増すごとに爆発的に（10倍、100倍に）拡大すること、②枯死した木は腐るのが早く、放置すると枝が落ちたり、根本から倒れたりして危険なこと、である。

最初に異変を感じたのは2020年梅雨明け。荘内のコナラの新緑が次々に赤茶色く変色した。特に1号館が建つ丘の斜面は、東山湖から見るとあちこちで茶色く変色した木々が目立った。前年（2019年）に「ナラ枯れ」被害木が2本、東山荘近隣で発生していたのは承知していたので「ナラ枯れ」を疑った。

「ナラ枯れセミナー」の開催——地域との協働

同じような被害はすでに広域で発生しており、近隣の秩父宮記念公園や二の岡神社、ゴルフ場、市内の公園や富士霊園などでも被害が発生しているようだった。しかし、実際、今何が起きているのか、どうすれば良いのかは、はっきりと分からなかった。

そこで、神戸大学で「ナラ枯れ」を専門に研究する黒田慶子教授に窮状を訴え、来荘していただくことになった。せっかくのこの機会を同じ被害に苦しむ方々にも広く開放すべきだと考え、静岡県・御殿場市・小山町の行政担当者の方々にもお越しいただき、2020年9月16日、東山荘講堂で『「ナラ枯れ」についてのセミナー』を開催した（「東山・二の岡路観光協議会」共催）。無料で一般開放したこのセミナーは、コロナ禍であったにもかかわらず盛況で、講堂はあっという間に満席になり、急遽、椅子を増やすほどだった。

このセミナーの意義は大きかった。これにより、「ナラ枯れ」という一つの問題を行政・住民を含めた地域一帯で共有することができ、一丸となって対処することができるようになったからである。

募金と伐採——危機を乗り越える

一方、伐採には多額の費用がかかる。コロナ禍で大幅な収益減となっている東山荘には泣きっ面に蜂であり、伐採費用を自力で確保することは難しかった。しかし、放置することは人びとが集う場として安全上許されない。この板挟みの中で、2020年12月、緊急の「ナラ枯れ募金」を開始し有志の方々からご寄付をお願いすることにした。するとすぐに多くの方、企業からご支援が寄せられた。伐採は2021年2月から断続的に行い、2024年11月にグラウンドのクヌギを伐採したのが現時点では最後である。伐採費用は計700万円を超えたが、そのうち約460万円を「ナラ枯れ募金」でまかなうことができた（2023年3月募金終了）。東山荘が多くの人びとから愛され、支えられていることを痛感した。また、先述のセミナー開催後、2020年10月から御殿場市と小山町はナラ枯れ対策の補助金事業を開始した。この補助金も3年間で60万円活用することができ、大きな助けとなった。

「ナラ枯れ」により荘内の自然環境も大きく変わった。コナラとクヌギを中心に、伐採した木は300本近くに及び（余りにも次々に大量に発生したため途中でカウントができなくなった）、範囲は荘内ほぼすべてに及んだ。長年親しんだ木々がなくなるのは寂しい反面、荘内がかなり明るくなり、林床に光がさすようになった。伐採地にはカエデや桜、カラムツ等の植樹を行った。伐採した木はできる限り薪にしたり、シイタケの原木にしたりして再利用し、現在でもシイタケ狩りを楽しむことができる。また、伐採のお蔭で荘内の“風通し”が良くなり、1号館や2号館では湿気被害が減った。

コロナ禍という未曾有の緊急事態の中で「ナラ枯れ」被害に対処できたのも、1世紀以上にわたり、地域に根付き、人に仕え人に支えられる東山荘だったからこそと思う。



主催キャンプでシイタケの菌打ちを行った

2021年から2025年まで

コロナショックからの回復

未曾有の事態となった2020年度、「光は暗闇の中で輝いている」（ヨハネ福音書1章5節）という聖句のごとく、YMCA東山荘は閉塞感に満ちた社会や人びとの心を照らすべくできる限りの活動を主体的に続けてきたが、その一方で、東山荘が多くの人びとから愛され、支えられ、祈られていることを実感する時でもあった。募金や献金、寄付等を通して、多くの企業や個人の方が東山荘を支えてくださった。デイキャンプやオープンデイの時、また時に手紙を通して、直接・間接を問わず実に多くのご声援をいただいた。

時間が経つにつれて新型コロナウイルスとの共存も進み、社会経済活動や人流も戻ってきた。それに伴い東山荘の利用者数も回復していった。宿泊利用者数を見てみると、2019年度は33,158名だったのがコロナショックの2020年度は4,867名まで落ち込んだが、2021年度は8,209名まで増え、2022年度は20,768名、2023年度は28,962名、そして2024年度は30,027名と3万人台にまで戻った。

客層の変化

客層を見てみると、コロナ禍の前後ではやや変化が見られる。2019年度と2024年度の宿泊利用件数と宿泊者数の表を掲げてみる。

客 層	2019		2024	
	件数	人数	件数	人数
YMCA	35	1,989	49	2,597
保育園・幼稚園	29	1,880	18	1,153
小学校	26	2,804	36	3,649
中学校	14	3,061	22	4,805
高校	25	6,372	15	4,579
大学・短大	14	1,849	16	718
専門学校	3	280	0	0
その他学校	3	48	3	106
企業	180	6,010	115	4,907
教会関係	53	3,685	60	4,264
個人	511	2,001	198	871
生涯学習	44	960	33	904
青少年	25	1,614	17	1,279
非営利	18	605	8	195
計	980	33,158	590	30,027

2024年度は、全体としてコロナ前（2019年度）に3,131名（390件）達していないものの、小学校は845名（10校）増、中学校は1,744名（8校）増、YMCAは608名（14件）増、教会関係は579名（7件）増となっている。とりわけ小中学校は2,500名近い増加となっており顕著である。他方、減ったのは、高校1,793名（10校）、大学・短大1,131名（2校）、企業1,103名（65件）、個人1,130名（313件）、保育園・幼稚園727名（11件）が目立つところである。

課題と展望

中学校・高校は件数自体は少ないが、利用人数が多く、2泊利用が多いことが特徴である。小学校は全体的に人数が減少傾向にあるが、一部の地域では増加している学校も存在する。教会関係は夏季の利用が多く、特にお盆期間（8月13日～15日）には予約が集中している。大人が休暇を取得しやすい時期であることが要因と考えられる。また、コロナ禍により、一部のキリスト教系施設が閉館を余儀なくされたこともあり、東山荘への問い合わせが増加しているが、希望する日程が重なることが多いためすべてを受け入れることは難しく、予約担当者は調整に苦慮している。

東山荘を利用する多くの学校が“ふじさんぼ”（富士山ハイキング）をはじめとするネイチャープログラムを希望し、実施している。子どもたちがネイチャープログラムに高い関心を持ち、活動後には笑顔で帰っていく様子は、学校団体に対する教育的効果が高いことが伺える。夏季には民間のキャンプや教会の夏期学校によるネイチャープログラム利用が増加している。また、大学生協を通じたゼミや研究室の団体利用も回復傾向にある。特にコロナ禍以降バスでの来訪も増加している。

東山荘としては、若い世代への満足度を高め、引き続き対応できるよう2025年1月から3月にかけて6号館の改修工事を行った。また、インバウンド利用者や個人客の獲得を目指すため、当座の取り組みとして、国内のオンライン旅行代理店（OTA）だけでなく海外OTAも活用する予定である。

2025年度は現時点（4月30日）で約26,500人のご予約をいただいている。これは前年比で約1,500人増である。安定した運営には3万人以上が目標であるものの、人数にかかわらず、東山荘を訪れる一人ひとりの方にとってかえがえのない滞在になるよう、職員一同、引き続き努めていきたい。

第二部

第二部では、「歴史」「地域」「世界」というトピックごとに、YMCA東山荘がここ10年間で果たした働きなどについてふりかえってみたい。最後に「未来」に目を向け、YMCA東山荘が今後さらに100年間、「地の塩」「世の光」として進むべき道について考えるよすがとしたい。



第20回アジア・太平洋YMCA大会（2019年9月）

歴史とともに

静岡県景観賞優秀賞の受賞

東山荘の景観が長い年月をかけ建物と自然の景観が見事に調和している点が評価され、100周年を迎えた翌年の2016年、第9回静岡県景観賞優秀賞（民間施設部門）を受賞した。「約2万坪の広大な敷地内には豊かな樹林と、四季折々の草花や野鳥が身近に感じられる環境の中、木造の研修施設など建築物群が東山荘の変遷を表しています。1975（昭和50）年には、祈りの場として、黙想館が完成しました。（中略）黙想館内部は、正面のピクチャーウィンドウにより富士山の眺望を視対象とする配列になっており、訪れる人が富士山と一対一で向き合うことができる空間です」と紹介された。

国の登録有形文化財への登録

二つの歴史的な建造物が、2020年3月19日付で国の登録有形文化財に指定された。

①フィッシャー館

フィッシャー館は、日本における初期のYMCA運動の推進に貢献したゲレン M フィッシャー氏（1873～1955）の寄附により、1950年に建設された。フィッシャー氏にちなみ「^{フィッシャー}英一舎」と名



づけられ、当時は聖書研究室として用いられていた。建物はウィリアム M ヴォーリズ（1880～1964）が設計。フィッシャー館の他にも、初代の木造本館（講堂）や宿泊棟もヴォーリズにより設計されたが、現存するのはフィッシャー館のみである。建物は東山湖越しに富士山を正面に眺められるように配置されており、周囲の環境や日本人が受け入れやすいデザイン、洋館を思わせる赤い屋根が日本と西洋の融和を感じさせる。

②齊藤記念館（1号館）

齊藤記念館は、元日本YMCA同盟総主事齊藤惣一（1886～1960）の日本のYMCA運動への大きな貢献を記念して、日本YMCA同盟結成60周年にあたる1965年に建設された。齊藤惣一は関東大震災後の復興のため約10年にわたり東京YMCAに総主事として転出。

その後も日米交流に尽力し、第二次世界大戦後は政府の懇請により引揚援護院長官に就任するなど、日本におけるYMCA運動の推進に努めた。齊藤記念館の設計は体育や青少年教育に造詣が深い村田政真（1960～1987）。重厚な自然石張りの内壁と外壁や建物内にある暖炉は、落ち着いた空間を作り出している。YMCA運動を牽引した齊藤惣一の功績と戦後の日本の歩みを感じることができる。



地域とともに

御殿場市東山青少年広場

YMCA東山荘の裏門を出て3分程歩いたところに「御殿場市東山青少年広場」がある。「青少年会館」として半世紀にわたり親しまれた場所だったが、老朽化のため2017年に解体され、その跡地に御殿場市が広場を整備したのである。雄大な富士山を望む広大な芝生広場やグラウンド（運動広場）を有するほか、炊事棟や野外炊飯場を備え、また災害時には地区民の安全な避難場所としての防災機能も持つ多目的の広場である。2017年4月の開所以来、御殿場市との契約により東山荘が指定管理者として運営を担っている。地域のひとの散歩や憩いの場、子どもたちの遊び場としてはもちろん、学校の遠足や、ガールスカウトやボーイスカウト等の青少年団体の野外活動の場所としても使用されている。

東山・二の岡路観光協議会

もともとは2014年、東山地域の活性化と将来へのより良い地域づくりに向けて、この地域の歴史文化にゆかりの深い施設や地元自治会長などを中心に「東山路観光協議会」を立ち上げたのが始まりであった。東山荘が事務局を担い、市の助成も受けて、観光案内を兼ねた「お散歩マップ」を刊行するなど、観光客や利用者の便に供している。2018年には地区を二の岡にまで拡大して「東山・二の岡路観光協議会」に改名し構成団体の数も増えた。静岡県グリーンバンクの助成を得て該当地域にツバキやミツバツツジの植栽を行ったり、2020年には「ナラ枯れ」に対処すべくセミナーを開催したりするなど、地域の活性化と顔の見える関係づくりを進めている。

YMCAピンクシャツデー

「ピンクシャツデー」とは、毎年2月の最終水曜日に行われるカナダ発祥の世界的ないじめ反対運動である。その運動に賛同した日本のYMCAは、2016年より全国の拠点で活動を行い、YMCA東山荘もその活動の一端を担っている。

東山荘では、御殿場ロータリークラブや各市町の教育委員会の理解と協力も得て、主に近隣の小・中学校にチラシとポスターを配布してアピールを行ってきた。当初は御殿場市および小山町にある小・中学校のみを対象に行ってきた取り組みだが、徐々にその範囲を拡大し、2025年には御殿場市・小山町内にあるすべての小・中・高等学校28校にチラシ約9,500枚とポスターを配布することができた。

「YMCAのチラシをみて、生徒会が主体となりピンクシャツ

デーを全校集会で取り上げた」、「毎年、先生がピンクシャツデーについて考える時間を設けてくれる」などといったエピソードも寄せられており、私たちが地道に続けてきたピンクシャツデー運動が少しずつ地域に根付いてきているのを実感する。ピンクシャツデーの取り組みを始めてからまもなく10年を迎えるが、変化する地域の状況にも対応しつつ、これからもこの取り組みを推進していきたい。



チャリティーゴルフ

多くの企業・個人の方にご協賛いただき、2015年12月に第1回チャリティーゴルフを開催して以来、回を重ね、2024年10月で第10回を迎えることができた。第9回からは御殿場市国際交流協会のご協力をいただき、主に御殿場市在住の外国籍の子どもたちの支援を目的に開催している（それと同時に災害被災者支援にも寄付は用いさせていただいている）。第10回チャリティーゴルフを受けて、2025年3月、御殿場市内の「ふじ山教室」（海外にルーツを持つ子どもたちが通う学習教室）の子どもたち52人と保護者、ボランティアを招待し、日帰りのデイキャンプを開催した。体育館でレクリエーションをしたり、荘内ウォークラリーをしたり、カレー作りなどを楽しんだ。ささやかな奉仕ではあるが、今後もより良い地域づくりのため活動を継続していきたい。



世界とともに

第20回アジア・太平洋YMCA (APAY) 大会

2019年9月2日から6日まで、東山荘を会場に第20回アジア・太平洋YMCA (APAY) 大会が開催された。これはアジア・太平洋地域につらなるYMCAが一堂に会する国際大会で、4年に一度開催される。

“Living Together with in Nature on a Path to Peace” (自然の恵みに抱かれ、平和に向かって共に生きる) をテーマとするこのAPAY大会に、国内外から377名もの人びとが集った。富士山の雄大な自然を背景に、SDGsへの取り組みや自然との融和と平和を、ユースと共に考える大会に最適な環境を提供できたこと、参加者同士の懐かしい再会と新たな出会いの場となったことは、「国際青少年センター」としての東山荘がその役割を十全に果たすことのできた時となった。

このAPAY大会以前、日本でYMCAの大規模な国際大会が行われたのは約50年前の1965年の第4回世界YMCA大会だった。そのときの会場も東山荘で、東山荘の歴史的トピックのなかでも大きな出来事の一つである。歴史資料である関連記事や写真を見ては、誘致をした当時の日本のYMCAの主事や受け入れ当時にスタッフだった諸先輩方たちの働きに、ただただ感銘を受けるばかりで、私たちの世代がYMCAの国

際大会を受け入れることになるとは想像していなかった。「まさか私たちが」「今の私たちにできるのか」。多くのスタッフが、期待と共に、不安な気持ちを抱いていた。

大会期間中の東山荘の役割は、参加者が気持ち良く大会に参加できる環境を整えること。この一つの目標に向けて、スタッフ全員がその任にあたった。海外からの参加者が多いということは普段の東山荘とは違う点ではあったものの、日ごろのお客様をお迎えするという業務の蓄積は、大会運営を支える業務に確実につながった。YMCAのグローバルな動きの中で、東山荘のスタッフ一人ひとりが各々の役割を果たし、APAY大会の運営を支えたことで、スタッフの一体感も醸成された。

2019年から4年経った2023年、第21回APAY大会がインド・チェンナイで開催された。「日本の東山荘から来た」と言うと、「前回の大会はとても良かった」「東山荘のスタッフのホスピタリティーが素晴らしかった」「食事がおいしかった」など、お褒めのメッセージをたくさんの方が話してくれた。アジア・太平洋YMCA同盟からも感謝の表彰を受けた。東山荘で行われた第20回APAY大会の運営を支えたことは東山荘の誇らしい歴史の1ページである。



ウクライナ避難者支援

2022年2月、ロシアがウクライナに軍事侵攻した。日本YMCA同盟は、国内ならびに世界のYMCAと連携し、募金や避難者支援など即座に支援の行動を始めたが、東山荘ではウクライナから御殿場市に避難していた方に働く場を提供した。御殿場市在住のウクライナからの避難者3名が、2022年11月から客室担当として働き始めた。これは御殿場市と国際交流協会からの要請に応えたものでもあった。2名は都合により東山荘を短期で離れたが、ミラさんは約半年勤務した。

ミラさんとは、会話は少しの英語とウクライナ語のみで、スマートフォンの通訳アプリを用いてコミュニケーションを取った。

翻訳アプリで作成したマニュアルと身振り手振りで客室業務を伝え、直ぐに仕事の内容を覚え、ジョークを交えコミュニケーションも取れるようになった。しかし戦争による心の傷は深く、精神的に不安定な面もあった。ミラさんが何を求めているのかを知るため、コミュニケーションの時間を増やすことで彼女の笑顔が増えていった。

6号館4階から見る富士山が好きなこと。東山荘内の桜やツツジが好きなこと。パンを作るのが得意なことなど、多くのことを教えてくれた。

ミラさんが「ここにいると戦争を忘れられる。私は幸せです」と言いながら、涙を流し、ウクライナの映像を見せてくれた。無残にも崩れた街並み、生々しい銃弾の跡、そして入隊経験や愛する家族との別れなど。

ミラさんはウクライナの現状を日本の人に知ってほしい。「伝えること」が祖国を離れた自分の役目だと教えてくれた。

ミラさんの想いを伝えなければならぬと感じ、講演会を企画し、地域団体へ向けて開催した。ガールスカウト、御殿場ロータリークラブへ「ウクライナの現状」について3回の講演会を実現することができた。映像を交えたお話に参加者は真剣に耳を傾けていた。

「伝えられて本当に幸せな気分！ 素敵な仲間に出会うことができた!」とミラさんは喜んでた。

その後、2023年6月、ミラさんは東山荘を離れ、都内にあるウクライナを支援するウクライナカフェに勤務し、同郷の仲間と充実した生活を始めた。現在はミラさんはウクライナに帰国し、心理学の教員として働いている。

富士山と御殿場、東山荘が大好きなミラさんとの出会いは東山荘職員に平和について考える機会をくれた。ミラさんに感謝しつつ、笑顔溢れる平和な世界になることを祈っている。



講演風景



ミラさんから2025年4月、メッセージが送られてきた。「日本で伝えられている情報が正しいものであり、またウクライナを応援してくれていると感じます。いつも東山荘チームのことを思い出します。また皆さんに会いに行きます。」

未来に向けて

施設改修

多くの施設やインフラ設備が完成から30年以上経過し老朽化対策が課題になっている。2018年末に長年の懸案だった浄化槽を更新し、2020年2月～3月には地下に埋設されている1・2号館への電気高圧ケーブルも交換した。建物に関しては、宿泊利用者の多い6号館（1982年竣工）と、東山荘のシンボリックな建物である黙想館（1975年竣工）の改修工事を2024年末から2025年にかけて実施することができた。

①6号館

利用者数の拡大に対応すべく体育館と共に1982年に完成。鉄筋コンクリート造4階建て。2024年12月末から2025年3月まで約3カ月かけて全面リフォームを実施。改修費用は自己資金でまかかった。外壁の補修と塗装はもちろん、内装も絨毯や壁紙の張替え、トイレ・洗面台の交換、YMCAブランドで提示されているサポートカラーも取り入れた。また、6号館の改修にあわせて、5号館の共同トイレもリニューアルした。

②黙想館

黙想館は東山荘60周年記念事業として1975年に完成した、ラウンドトップに立つ“祈りの家”である。経年劣化により、内装の汚れや雨漏れ、外の石階段の破損等が懸念となっていた。黙想館改修のためにと篤志の方から多額の寄付をいただいたことで一気に改修計画が実現し、2025年2月～3月、5月に工事を実施。ホールの塗装、絨毯の張替え、雨漏れの修理、扉や窓の修繕、石階段や崩れかかった石垣の補修等を行い、より安心して使用できる施設となった。金物などは一点物のため再利用している。

その他の施設に関しても今後計画的に改修を進めていく方針である。国際青少年センターとして求められる要求水準の変化に対応しつつ、110年間という長い年月をかけて形成された“東山荘らしさ”は失わないよう施設整備計画を策定していきたい。

Sustainable Planet（環境負荷の軽減）

緑あふれる森や多様性に富む自然体系は東山荘にとって大きな財産である。これらを維持しつつ、さらに環境への負荷を軽減する取り組みを行っている。

東山荘は2021年3月に電力供給企業を変更し再生可能エネルギーの導入を開始した。

コロナ禍が終息を思わせる2023年6月には太陽光発電を開始した。太陽光パネルを本館、6号館、体育館の屋上に設

置した。晴天の日なら700～800kw/1日、一カ月で約20,000kwの発電が行え、電気代の削減にもなっている。2024年11月にはEVチャージャーの設置を行い、4台分の電気自動車の充電を行えるようになった。電気自動車の普及に伴い利用頻度は高まると予測する。太陽光パネル、EVチャージャー共に公的な助成金を用いて設置を行えた。2025年から、本館食堂入口にウォータースタンドを設置した。美味しいと評価をいただいている東山荘の地下水を利用しているスタンドである。職員は国連が提唱する「個人でできる10の行動」を意識し、カーボンの削減を目指しながら環境に優しい東山荘を目指して歩みを進める。

プログラムの提供

東山荘では、恵まれた立地と豊かな自然、そして長い年月をかけて築かれた人と人とのつながりを生かしてさまざまなプログラムを主催してきた。

年末年始に開催している「年末年始家族パーティー」は次回（2025年12月～2026年1月）で60回目の節目を迎える。もともとは東山荘を愛用する方々の私的な集まりで、夏に開催されたこともあったが、今では東山荘が主催するプログラムとして定着し、毎回200名近い方々が年末年始を東山荘で過ごす。期間中はさまざまなプログラムが展開され、参加者は自由に参加することができる。このパーティーの特徴を一言で言えば「大家族」であり、東山荘は「ふるさと」である。お年寄りも大人も子どもも問わず、そして血縁関係に縛られず、スタッフを含めた参加者全員が実家に帰って来たような安心感のもと一年に一度の再会を楽しむのである。

1996年から開始した東山荘オリジナルの“ネイチャープログラム”は、誰もが東山荘の身近な自然や富士山の雄大な自然に触れ、全身で自然を感じることができるプログラムである。確実に人びとの心を魅了し、今では東山荘の最も大きな集客力となっている。その時、東山荘に来なければ経験できないような自然体験型のプログラムを提供し続けているが、近年では「生きる力」に重点を置く、より教育的な内容に変化している。コロナ禍を経てその需要はますます高まっており、東山荘としては、できるだけ多くのご要望に応えられるよう努めている。



「第59回年末年始家族パーティー」にて

生まれ変わった6号館



景観に配慮した外観



各所に配置されたYMCAブランドロゴやサポートカラー



ベッドルーム



サイドルーム



講師室

綺麗になった黙想館



外観



大ホール（黙想室）



特製の木製扉



玄関ホール



窓

History 2015-2025

年代	出来事
2015年	YMCA東山荘創立100周年記念募金を終結（総額4,159万円）、新たに第2次募金（YMCA東山荘100年募金、目標10,000万円）としてスタート。キックオフミーティングを3月28日に開催 4月 1日 堀口廣司 所長就任 8月 29日～9月4日 YMCA地球市民育成プロジェクト夏期研修（2018年まで毎年8月下旬から9月上旬に東山荘で実施） 9月 26日 新本館起工式（38名出席） 司式：中島善子 御殿場教会牧師 10月 新本館着工 11月 21日 創立100周年記念感謝礼拝 司式：中道基夫牧師 創立100周年記念シンポジウム 基調講演「大森兵蔵とカレッジのミッション」 スプリングフィールド大学 メアリー・ベス・クーパー学長 パネリスト：山田公平、坂口順二、島田茂 12月 1日 第1回チャリティーゴルフ大会開催 12月 18日 東山荘100周年記念感謝会開催 12月 30日 第50回年末年始家族パーティー開催（594名参加）
2016年	2月 14日～3月6日 広岡浅子展開催 6月 18日～19日 第5回同盟協議会にてYMCAブランドコンセプトを発表 8月 31日 新本館完成 設計：池田通則、鍋田龍太郎 施工：臼幸産業 9月 20日 新本館グランドオープン 10月 9日 新本館献堂式（司式：関田寛雄牧師） 落成感謝会祝会 11月 25日 第9回静岡県景観賞優秀賞受賞
2017年	1月 20日 旧本館解体、跡地整備工事終了（10月1日～） 3月 11日 市民協働型まちづくり事業防災体験東山荘オープンハウス開催（以後3年間実施） 3月 31日 YMCA東山荘100年募金100,756,732円（募金件数1,101件）にて完了 4月 1日 神崎清一 同盟総主事就任 4月 17日 御殿場市東山青少年広場（指定管理）開所式 6月 17日～18日 第6回同盟協議会にて新ブランドロゴ、スローガンを発表 10月 5日 YMCA東山荘100年史編集委員会発足（委員長：坂口順治、徳久俊彦、神崎清一、堀口廣司）
2018年	4月 1日 YMCA東山荘友の会再発足 4月 テニスコート跡地売却 6月 第1回ウォールハンドボール東山荘カップ開催 12月 浄化槽更新 12月5日～7日 第12回日台YMCAマネージメントセミナー・日台YMCA連絡委員会を東山荘で開催 台湾から11名、日本から25名が参加
2019年	4月 全国椿サミット開催 6月 『東山荘100年の歩み』発行 9月 体育館エアコン設置 9月2日～6日 第20回アジア・太平洋YMCA大会開催。国内外から377名が集った 10月 12日 台風19号襲来。サイカチの木（県の天然記念物）が倒木（2022年1月伐採） 12月 AB浴室 脱衣室にエアコン設置

年代	出来事
2020年	1月 15日 新型コロナウイルス感染者が日本国内で発覚（中国では2019年12月8日） 2月～3月 新型コロナウイルス感染拡大の影響で3月、4月の多数の予約キャンセル発生 1・2号館の電気高圧ケーブル更新 3月 フィッシャー館、齊藤記念館登録有形文化財へ登録される 4月 1日 田口努 同盟総主事就任 4月 1日 森田義彦 所長就任 4月～5月に発出された「緊急事態宣言」により、利用者が不在となり、2020年度常勤スタッフは「十字の園」「平成の杜」の福祉施設に向向 5月 利用者が0となり事実上閉館状態に 6月 主催キャンプ、オープンデイ再開 カレーのテイクアウト販売を開始 7月 Go Toトラベルが開始されたが度重なる新型コロナウイルス感染者数の増加により一時中断となった 熊本豪雨災害支援に職員を派遣 8月 富士山の閉山により富士登山プログラムが実施できない史上初の事態に 9月 16日 講堂で『「ナラ枯れ」についてのセミナー」開催 10月1日～11月28日 日本YMCAスタッフ研修ステップIIを東山荘での集合型とオンラインを併用して実施 12月 「ナラ枯れ募金」開始。2023年3月終結（総額約460万円） 12月 30日～翌1月2日 感染症対策を十分に取り「第55回年末年始家族パーティー」開催。約70名が参加
2021年	Go Toトラベル（静岡元気旅）が4月1日以降に、感染状況が落ち着いているステージ2相当以下の都道府県から順次開始となり、中断・延長を経て、2022年10月10日（10月11日チェックアウト分）まで実施された 8月 伊豆山土石流災害に職員を派遣し、子どもや高齢者支援を行った
2022年	2月 24日 ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が開始 6月 18日～19日 第11回同盟協議会を東山荘での対面での実施を再開（一部ハイブリッド） 7月3日～9日 第20回世界YMCA大会がデンマークで対面とオンラインのハイブリッド型で実施 Vision2030が採択された 9月9日～12日 学生YMCA夏期ゼミナール東山荘にて再開 11月 ウクライナからの避難者3名が東山荘に就労 新型コロナウイルスが5類に移行。東山荘の利用がコロナ前利用の80%ほど回復した
2023年	2月 2号館客室、6号館会議室にWi-Fi設置 3、4号館販売中止 3月 経済産業省より約3,000万円の補助を受け本館、6号館、体育館にソーラーパネル設置（6月より稼働） 11月 1号館の浴室（EF浴室）脱衣室にエアコン設置
2024年	1月 1日 能登半島地震が発生。YMCA東山荘でも募金活動や避難所への支援を実施 2月～3月 1号館の浴室（EF浴室）の一部リフォームを実施 3月 荘内の道路灯をすべてLED灯に交換 10月 EV（電気自動車）用充電器4台分をロッジ駐車場に設置・サービス開始 2024年度は全体的に利用者数が増加し、年間の宿泊者数がコロナ前の約95%まで回復した
2025年	3月 6号館全面リフォーム完了（前年12月～）。5号館共同トイレ改修 5月 黙想館改修完了

110年の歩みとこれからのYMCA東山荘

今年は第二次世界大戦終結から80年を迎えますが、この平和が今後も維持され、戦後100年を迎えられるのか、多くの方が危機感を抱いていることと思います。YMCA東山荘の歩みもまた、戦前、戦後の社会情勢に大きく影響を受けてきました。

日本で最初のYMCA（東京YMCA）が1880年に誕生してから145年。各地に都市YMCAや学生YMCAが広がる中で、1889年に学生YMCAの第1回夏季学校が同志社で開催され467名が参加、以来、参加者は回を重ねるごとに増加し、全国のキリスト教青年の全国大会のようだったと言われました。新島襄の講演があり、参加した山室軍平など多くの指導者をも輩出しました。100名を超える青年が集い、寝食を共にしながら自由に議論できる場は、ますますその必要性を増していました。ちょうどその頃、戦争の足音が忍び寄る時代にあって、自由闊達な活動ができ、純粋に聖書を学ぶことができる恒久的な拠点の必要性がより一層高まっています。そして1911年、夏季学校常設館の計画が具体化し、東山に土地が購入されます。第一次世界大戦の影響を受けながらも、計画から5年後の1915年、講堂と宿舍1棟が完成し、第25回夏季学校開催中にYMCA東山荘の献堂式が執り行われました。学生YMCAの中心にあった夏季学校は、戦後、「夏期ゼミナール」と名称を変え、現在に至るまでその精神は継承されています。

1923年の関東大震災で建物の一部が倒壊するも、米国YMCAの支援を得て再建。太平洋戦争直前の、軍国主義が最高潮に達した中、1940年には、第50回記念夏季学校が開催され、フィッシャー夫妻をはじめ300名の参加者が集まり、賀川豊彦や齊藤惣一らの講演を通して、混迷する時代におけるキリスト者の使命が語られました。しかし、翌1941年には太平洋戦争開戦に伴い夏季学校は中止に追い込まれます。戦時下で活動の継続が困難になる中、1944年には学徒出陣により多くの学生が戦場へと送られ、夏季学校は開催できませんでした。それでも、機関誌『開拓者』で誌上開催という形でメッセージを発信し続けました。1945年終戦（東山荘開設30年）を経て、1946年には東山荘も復興し再開。全国のYMCA運動の復興の拠点となり、各種大会が開催されていきました。第二次世界大戦という危機を乗り越え、開設から50年後の1965年には、国際ユースセンター齊藤記念館（現在の1号館）、前の本館が建設され、世界YMCA同盟第4回総会が開催されました。戦後20年目に世界と再びつながる喜びが与えられ、これ以降、国際ホールやプールの建設など、施設の拡充が進められていきます。1975年には60周年事業として、黙想館が献堂され、祈りの場が生まれました。1979年には第1回世界大都市YMCA会議が開催され、1982年には新宿舎（現6号館）が完成。そして2015年の100周年事業では新本館が建設され（2016年完成）、2019年にはアジア・太平洋YMCA同盟第20回総会が開催されるなど、その歩みは止まることなく続いています。

この10年間、特に未曾有のコロナ禍への対応は、東山荘の新たな歴史として刻まれました。感染予防のために人と人とのつながりが断たれると同時に、世界では分断が進み、侵略戦争や紛争、民主化弾圧など、不穏な空気が世界を覆っています。東山荘は、いつの時代も、自由に意見を交わし、多様な価値観と出会い、人に会い、神と出会うことで、「人間とは何か、いかに生きるのか」を問い続けてきました。まさに、「みつかる。つながる。よくなっていく。」場として、そして隣人と共に生きる共同体の原体験を生み出す場として、その役割を果たしてきたのです。

これからもYMCA東山荘が、ポジティブネットのある豊かな社会を創造していく働き人として、人びとをエンパワーメントし続ける場として歩んでいけるよう、皆様の温かいお支えと祈りをお願い申し上げます。



日本YMCA同盟総主事
田口 努

TOZANSO MAP



YMCA東山荘110年の歩み ——2015年から2025年まで——

2025年6月21日発行

発行 YMCA東山荘

〒412-0024 静岡県御殿場市東山1052

Tel 0550-83-1133 Fax 0550-83-1138

本文編集 森田 義彦 杉野 歌子 滝口 敦子 阪田 祥章

制作 pros creative